

永文季和

第130号
(平成26年10月25日)

目次

巻頭言……………	1
★特集 日本とドイツから 「永久平和を考える(下)」………	2
元ハンブルク大学客員教授 仁科悟朗	
●会員だより……………	8
●パラオに残る日本人の心 仲條江里子	
◆書籍紹介……………	
◆昭和天皇の御製 連載⑤ 岩崎章次	
●産経新聞より……………	10
「子供たちに伝えたい 日本人の近現代史」 「記事を読んで」 仲條拓躬 「法要の」報告 山崎八九生	
●編集後記……………	12

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

——明日へのご招待——石原莞爾の思想——

歴史の“イフ”を研鑽する意義



山崎八九生(本会事務長)

今年は第一次世界大戦(以下WWI)勃発から100年であり、来年は第二次世界大戦終結から70年になる。

日本はWWIの戦勝国として、イギリス、フランス、イタリアと共に国際連盟の常任理事国となり、ドイツから広大な委任統治領を得た。他方アメリカは、債務国から債権国に転じ、時代はそれまでのイギリスからアメリカの時代となったが、国際連盟の設立提唱国にも係らず議会の承認を得られず、オブザーバー的地位にとどまった。しかも日本が得た委任統治領は地政学的にハワイとフィリッピンの上に位置する広大なエリアであり、グアム島はそれに囲まれてしまった。

そして日本の悲劇は、WWI後の「帝国主義的な膨張主義を慎もう」という時代の変化を読めなかったことにあると思う。

そんなアメリカとつて日本は排除すべき邪魔な存在であったことは想像に難くない。1922年のワシントン会議で日英同盟を廃棄させ、主力艦を対米6割にさせたのはその一環であった。その意味では日米戦争たる太平洋戦争は不可避だったのかもしれない。

しかしそうだとすると、ハルノートを突き付けた1941年11月の時点ではアメリカは日本との戦いをもう少し先延ばししたいと思っていたし、また日本が開戦を12月中下旬にしていたら独ソ戦の推移を勘案して対米戦を断念した可能性も考え

られる。あるいは当時の日本の指導者に1895年の三国干渉を受け入れた明治の指導者たちの隠忍自重の度量があれば、少なくとも「先延ばし」はできたと思うし、そうなれば戦後の冷戦も相当異なった形で推移したであろう。

黒船によって「無理やり」開国させられた日本だが、そんな時代に生まれた攘夷思想はやがて明治になって欧米の植民地政策に対抗する「大アジア主義」へと進化した。さらにそれを太平洋戦争で「アジア解放戦争」に昇華できたのかもしれないが、一部の、たとえば中野学校出身者はそのような想いで戦ったものの、全体としては対米英戦の資源獲得の軍事行動のレベルに留まつてしまったことを残念に思う。

歴史のイフを「死んだ我が子の歳を数える」みたいな感傷的なレベルに留めるのではなく、歴史を学ぶのと同様に、歴史のイフを研鑽することは、現在進行しつつある蹉跎を未然に防ぎ「転ばぬ先の杖」を生む「賢者の選択」になり得ると思う。

歴史は繰り返さないが、似たようなことは繰り返す。昨今の「イスラム国」に対する空爆は、約100年前のロシア革命潰しのシベリア出兵(日本が一番多く派兵し、一番後まで駐留した)を彷彿とさせる。シベリア出兵のような「外科的手術」を行った結果、かえって愛国的に結束させてしまい、生き伸びた共産主義はやがてソ連のスターリン、中国の毛沢東、カンボジアのポルポト、北朝鮮の金一族といった残忍な独裁者と人権蹂躪の国家を生む結果になってしまった。「イスラム国」にそのような轍を踏ませてはならない。

編◆集◆後◆記

▼2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9を記録する大地震が発生し、ビルの倒壊や火災により多くの方々が亡くなった。強い揺れだけに留まらず地震はさらに海から大きな魔物を送り込んだ。沿岸部は津波に襲われて広範囲で住宅が流され、被害が拡大した。大震災が起きた直後、私が住む我孫子市では液化化現象が起こった。ライフラインも広い範囲で寸断され、断水した。家族が心配のさなか交通機関は遮断され動けなくなった。このため、職場から家族の下へ向かう手段を失い「帰宅難民」が街にあふれた。一夜を施設内で過ごした方もいた。

ネットを見れば、おぞましい光景が映し出される。家族の安否が気になる。自然の猛威に対して人間はいかに無力であるかを痛感させられた。被災地は空襲されたような惨劇であると、戦後の混乱期と同様の状況にあると年配者は語る。終戦をむかえ閉塞感の漂った戦後間もない頃、過酷な状況を我慢して耐え、襲い掛かる災害にめげない日本人の素晴らしさを見て、諸外国が復興に驚いたという。

現在、子ども達を放射能の脅威から守ろうと日夜努力が続いている。果たして放射能を封じ込め収束することが出来るのであろうか。子どもたちの親として心強く復興を胸に刻むとともに、科学はいかにあるべきかを原点から見直すべきである。

希望を持てる日本にするには、今後、一人一人の生活スタイルを変え、持続可能な環境に安全なエネルギーを積極的に取り入れなくてはならない。放射能災害が深刻化する今、安全で安心の食料生産の大切さについて考えて頂きたい。日本の農業や酪農・漁業の安全安心を願わざるを得ない。

被害に遭われた方々、またホットスポットの地域に住む方はさらに恐怖を感じている。環境問題でも、原子力は自然を大切に守るのではなく、むしろ破壊した。自然に関する科学的な知識の増大と人間中心主義の高まりと理解すれば、単なる一民間企業の事故では済まされない。進歩が加速した現代は、人間の叡智、倫理が追いついていない。科学技術の進歩は人類を豊かにしているが、一方では、地球の命を蝕んでいる。科学は命を大切にすることもあつて欲しい。

一つ一つの生命とともに、命の繋がりを過去から現在、そして未来へとすべての時空を大切にする精神がなくてはならない。放射能濃度は今、日本政府が指定した避難区域をとうに超えている。いまに、白血病や甲状腺癌の増加が見えてくるだろう。それは多量の放射性ヨウ素や放射性セシウムを環境に放出した結果だ。

放射線物質は日本全国から見つかった。小さな子供がいる家庭や妊婦の方は、飲み水や食べ物はどうするべきか迷うだろう。一部の人々は積極的にホットスポットから避難した。なぜなら、放射線が与える全ての影響を低く見積もる発表を単に信じていないからだ。

大気中の放射線量の測定が急速に広がった。

私もビオトップ水田の代表や有機野菜などを作っている一人としてガイガーカウンターを自給体より先に購入した。また、外部被曝より内部被曝の方が深刻である。一度体内に取り込むと放射性物質の種類によっては、体の中で半減期になるまで何十年間も放射線を出し続けるのだ。

石原莞爾平和思想研究会の運営を務めて時が経ちましたが、放射能問題などの話題について、皆様と語り合い、交流がもてた事を心から感謝しております。今の日本国、厳しい状況が続いておりますが、このような時期だからこそ希望を持ち、前向きに進進しなければと日々考えております。震災で苦しんでいる方に幸多き時代となります事を祈念申し上げるとともに、皆様のご健康とご健勝を併せてお祈り申し上げます。

仲條拓躬

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒179-0076 東京都練馬区土支田3-46-7

山崎行政書士事務所内

TEL(FAX兼用) 03-3925-2353 (山崎)

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第130号 平成26年(2014年)10月25日発行